315 イムノPTHintactキットの検討

今村康、林原典生、水谷利栄、武田弘紀（バクスター株式会社　RIA試験研究所）

血中副甲状腺ホルモン（PTH）は骨組織に直接に作用してCa動員作用をしめす。PTHは代謝をうけ、種々のフラグメントに分解する。今回、検討したキットは完全な形の1-84PTH（intactPTH）を測定する。
測定は、血清または血漿200 μl に固相化されたアフィニティ精製ポリクローナル抗体およびトレーサー100 μl を加え、20～25℃、22時間、インキュベーションした。 種々のフラグメントとの反応性は0.2%と低く、intactPTHとの特異性は高かった。　感度は、5 pg/ml 、測定範囲は17～2800pg/ml であった。標準曲線の再現性（C.V.%)は、3.7 ～12.4%、添加回収率は、平均97.9 %であった。既存品との相関は、Y=1.04×X＋3.11　r＝0.99と良好であった。

316 イムノPTH－MMⅡキットの検討

林原典生，今村康，水谷利栄，武田弘紀（バクスター株式会社　RIA試験研究所）

イムノPTH－MMⅡキットは血中に存在する種々のPTHのフラグメントのうち、PTH中央部の構造を有する分子を測定するキットである。長期にわたって徐々に進行する慢性腎不全などの定期的経過観察時の使用に適している。
イムノPTH－MMⅡキットは、第一反応が20～25℃、15分間、第二反応が2～8℃、2時間、第三反応が20～25℃、15分間であった。標準曲線の再現性(C.V.)は、2．45～5．49%、感度は、2SD法により、13pmol/lと良好であった。管理血清の再現性も3．7～11．3%と良好であった。回収率及び希釈試験も良好な結果であった。既存品との相関は、 Y=0.65 X+30.1　r=0.94と良好な相関を示した。

317 DNAプローブ法によるマイコプラズマ感染症の基礎的検討および臨床的応用

大塚英司，市原真，足立信一（大和市立病院・RI室）

DNAプローブ法はDNAの相同性を利用して，微生物のDNAを検出する方法で最も特異性が高い。
検体は咽頭ぬぐい液を用い，そのマイコプラズマ菌の核酸ハイブリダイゼーションを直接検出する方法である。

今回本キットの基礎的検討を行うとともに，マイコプラズマ菌にペニシリンG，またはエリスロマイシンを加え，核酸ハイブリダイゼーションにおよぼす影響を検討した。

臨床的応用として健常成人70名について測定し，カットオフ値は 3.0以下となった。また小児科領域におけるマイコプラズマ感染症について検討し，血清診断とも比較した結果を報告する。

318 ミオシン軽鎖Iと^{1}H－MRS測定におけるアドリアマイシン心筋障害検出の検討

中村立子，外山貴士，木村浩彦，石井　靖　（福井医大放射線科）山本雅之，李鍾大（福井医大　一内）

アドリアマイシン（ADM）慢性心筋障害の早期発見及び重症度判定にミオシン軽鎖I及び^{1}H-MRSの測定が有用か否かを動物実験にて検討した。2 ～2.5 Kgの家兎にADM4mgを2 回／週耳静脈より投与し、5 週かけて慢性心筋障害モデルを作成した。6 症例中3 例に心電図異常，心肥大，心嚢液貯留が認められた。^{1}H-MRSにおいては、異常のあった3 例にlactate,alanine の上昇が認められ嫌気性代謝の亢進が示唆されたが、ミオシン軽鎖Iは低値であった。異常のみられなかった2 例において、ミオシン軽鎖Iが軽度上昇していた。また、^{1}H-MRSにおける遊離カルニチンの測定値は、全症例ほぼ正常であり、脂肪酸代謝の抑制はないと思われた。

319 各種腎疾患におけるRIA法による血漿ｴﾝﾄﾞｾﾘﾝ測定の有用性について

荒井　孝，山本英明，松本智尋，山口　明，池井勝美（埼玉小児ｾ･放）

ｴﾝﾄﾞｾﾘﾝ(ET)は、強力な昇圧作用のほか、腎血流量や糸球体濾過量の低下作用などから、血圧や体液量の調節に関与する体液因子である可能性が報告されている。今回われわれは、腎不全、特発性ﾈﾌﾛｰｾ症候群などの腎疾患を中心に、測定系の基礎的検討も含めて検討した。

各種腎疾患における血漿ET濃度は、腎不全では(n=7、21.1±3.6pg/ml) 高値を示した。また、特発性 ﾈﾌﾛｰｾ症候群は尿中蛋白陰性期(n=19、3.9±1.3pg/ml) に比べ、陽性期(n=6、6.4 ±2.1pg/ml) では有意な高値が認められた($p<0.01$)。今後、病態との関係についてさらに詳細に検討して報告する予定である。

320 平衡透析－ラジオイムノアッセイ法からみたアナログFreeT4 RIAの評価

村上　稔、末廣美津子、尾森春艶、樽岡陽子、木谷仁昭、福地　稔（兵庫医大、核）

最近、平衡透析後血中FreeT4値を測定する理論的には最も理想的な測定法の利用が可能となった。そこで本法を基準にアナログFreeT4 RIA(A法)の評価を行った。

方法は、両測定法で得られた測定値の比較、各々の標準液中の組成の比較、および自家製標準FreeT4溶液を用いた標準曲線の比較を行った。結果は本法とA法との測定値はr=+0.96と有意の相関関係が認められた。ところが本法とA法との標準液中の組成は大きく異なり、自家製標準FreeT4溶液による検討では、本法が0.01~10ng/dlで抑制が認められるのに対し、A法では10~10000ng/dlと1000倍必要であった。以上の検討からA法は血中FreeT4値測定法としては問題があると考えられた。

Presented by Medical*Online